

のではないかと考える。そしてそれは「風流侍従」という、天皇に近侍し、天皇とともに行事、儀式、宴に携わり、宮廷の儀礼、文化に深く関わるという特別な環境にあったからこそ、このような歌い方を成しえたのではないか。そういった「風流侍従」の存在は、天平文化を築き上げる上でも重要な意味を持っていたと述べた。

大伴旅人と吉野

——「象の小川」を中心に——

久世しほ美

大伴旅人は、『万葉集』に、数多くの歌を残し、一番初めに作られたとされているのが、三一五・三一六番歌である。そして旅人の唯一の長歌でもある。神亀元年の吉野行幸で旅人が詠んだ歌である。そして、反歌ではそのときに見た風景として、「象の小川」を選び取り、歌に収めた。なぜ旅人はここまで吉野、その中でも「象の小川」にこだわったのか、数ある景色のなかでも、なぜ「象の小川」を選び取ったのかを明らかにしていくことを目的とした。

結論として、長歌は、柿本人麻呂の歌を受けながら歌った儀礼的な歌だった。聖武天皇の新政治を「象の小川」に見立て、宣命を取り入れながら、すみやかなまま続いていってほしいという旅人の願いが込められた。そして反歌では、「象の小川」に注目した。「象の小川」の景色を詠むことで、長歌とはまったく違う世界を表現して、旅人の個人的な強い思いを織り込んだ。これだけ力を入れてつくられたこの歌は、この後作られた旅人の歌の土台となっていくのだらう。「象の小川」の歌は、集中に二首しかなく、二首とも旅人によって歌われた。この、細く小さな「象の小川」の景色を選び取って、それをうまく歌うのは、懐風藻に歌を残した旅人らしいと

いえる。そして、この当該歌だけでなく、その後にも「象の小川」について歌った旅人。それだけこの「象の小川」は、旅人にとって忘れられないものとなっているのだ。

万葉集代作歌の変遷と到達

志賀 仁美

万葉集には、代作だと論じられている歌が数多くある。その中で、天平期に初めて題詞に代作歌であると記されたと分かるのが、四一六九〜四一七〇番歌の家の婦が京に在す尊母に贈らむが為に、誂へられて作れる歌である。この歌は、家婦坂上大嬢が奈良の京にいる母君大伴坂上郎女に贈る為に、頼まれて家持が作った歌とされている。また、この歌には贈った相手、郎女の返歌とされる、四二二〇〜四二二二番歌が存在し、代作された歌が贈答歌として成り立つのは万葉集においてこの歌だけである。

本論では、当該歌までの代作歌がどういったものか時代順に考察し、その中で、後期万葉の代作歌である当該歌がどのようなものであるのか、またそれに至るまでの要因を論じたものである。

結論としては、当該歌は、前期万葉から代作歌とされる歌の歌う場と歌本来の口誦性から文芸性への変化によって、集団を意識した前期万葉の代作歌のものから変わり、個人を意識して歌われる代作歌の完成された、代作歌の到達点であると考えた。そして、家持が贈答歌として成り立つ個人的な代作だけでなく、男性が女性の気持ち、遠い場所に住む妻の母を想う気持ちを歌い上げること成功した歌であると論じた。また当該歌は、万葉集編纂者自らが、そうしたことを代作歌を通して試み、新しい世界を作ろうとしたことに、万葉集における代作歌だけでなく、家持自身の歌における到達点

を、表しているのではないかということ述べた。

葛飾の真間手児名伝説歌

——山部赤人作歌の視点から——

鈴木加世子

関東の下総国に伝わっていた真間手児名伝説について、集中で詠まれている山部赤人の歌（三・四三一〜四三三）や、高橋虫麻呂の歌（九・一八〇七、一八〇八）、東歌に収録されている二首（一四・三三八四、三三八五）の中でも特に山部赤人の詠んだ歌に心惹かれ、本稿で、その山部赤人歌について、諸注釈書『萬葉代匠記』『萬葉集略解』『萬葉集古義』『萬葉集新考』『萬葉集全釋』『萬葉集總釋』『萬葉集評釋』『萬葉集全注釋』『萬葉集私注』『萬葉集注釋』『萬葉集全注』『萬葉集釋注』の解釈すべてを句単位でみるとともに、そこから導き出される歌の意を考察した。

結論として、高橋虫麻呂が伝説の真間の手児名を、想像とともにその美しさをありありと詠い、彼女の姿を鮮明にさせたのに比べ、山部赤人が伝説の内容の詳しい描写をせず、ただ彼女の墓所を見てその感慨を詠い上げたのは、はるか古の真実のわからなくなってしまう真間手児名伝説を、歌による伝説の余計な脚色を避け、「手児名」という古に存在したという一人の名高い美女に対して鎮魂の意を込め、伝説の内容の埋没をはかなみつつ、当時を偲び詠われたものだと私は解釈した。

山部赤人と文芸

——登神岳作歌をめぐって——

船尾 清香

本稿は『万葉集』巻三にある「登神岳作歌」を取り上げ、赤人について改めて考察することを試みた。この歌は一般に、明日香古京に対する懐古の情をうたったものであると考えられている。それは、もはや定説と言っても過言ではない。しかし、ただの「明日香古京に対する懐古の情」を詠んだものではなく、赤人の「遊び」がうかがえる作品ではないかと思われた。

赤人の活躍した万葉第三期の時代環境を考えると、あえて行幸などの場で遊びの要素的に恋歌の歌句を入れることはなんら不思議ではないと思われる。当該歌では人麻呂に見られる典型的な国土讚美的天皇讚歌を踏襲し、一見すれば明日香古京に対する懐古の情や、いにしえをしたう気持ち詠んだような歌を作りながら、「見るごとくに 哭のみし泣かゆ いにしへ思へば」と詠みこみ、さらに反歌では恋歌を詠むことが、赤人にとっての遊びであり個性である。そして、金村や千年との詠風の違いとして、純粹に相聞の私情を詠んだのではなく、あえてだまし絵的に詠むのが赤人であり、このことこそ世に自然歌人と称された彼の新たな芸の「技」とでもいべきものであると思われる。他の作品においても、人麻呂の歌句を数おおく踏襲しながら、決して同じではない、赤人オリジナルの作品ができるのは、彼の個性、そしてすばらしい芸の技の表れであろうと考えた。